

～ セピア色の風景 ～

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

「おかいこさん③」

蚕（かいこ）は一度にみんな透き通るわけではないため、順に選別していきます。

選ばれた蚕を次の作業の所に運ぶのが、子どもの仕事でした。二階からの運搬は、床をくり抜いた四角の穴を通して、つるされた籠の往復で行われました。

次に一定の大きさの繭（まゆ）づくりに誘導するため、碁盤の目状（正確には、長方形）の回転まぶしというポール紙製の枠に這（は）わせまします。蚕は、その枠の中に入り、口から吐く糸で外側から内側へ楕円形の繭を作っていきます。蚕がどんどん小さくなり、吐く糸が重なり真っ白となり見えなくなります。そして蚕は蛹（さなぎ）になります。

2～3日だったでしょうが、繭が固くなると収穫です。回転まぶしから繭を取り出し、周りに付いている「けば」

を機械で転がしながら取り除きます。そして、その繭を出荷します。

繭の中には、たまに蚕2匹が入ってしまった、形がいびつで固いものが出来上がります。これを「親繭（おやまゆ）」といいます。

親繭は、商品価値が低いため取り除いて自家用にします。自家用とは、真綿にするのです。親繭を茹（ゆ）でて蛹を取り除き、繭をぬるま湯の中でゆっくり引き伸ばします。そして、四角の木枠の四方にくくり付けます。何個かの繭を重ねた後、四角状のまま天日乾燥させます。これが真綿です。

真綿は、薄くはがしながらさらに伸ばし、布団や綿入れ半纏（はんてん）を作る際、布側に貼り付け綿と布のズレ止めに利用したのです。戦後、和装から洋装への転

換、ナイロンの登場などで、近代日本の主産業であった蚕糸業、絹織物産業、その基礎となる養蚕業が衰退する状況は、わが故郷相馬も同様でした。繭価格の低下で生産性が悪くなり、わが家の養蚕も廃業せざるを得ませんでした。

大量の蚕が桑の葉を食（は）む音は、雨音のようでした。毎回聞きながらも、思わず外は雨かと、戸を開けることがしばしばでした。

いずれ蛾（ガ）となり飛び立つことを夢見ながら、頭を上下に動かし必死に桑の葉を食む姿と、雨降りに似た音風景は、斜陽となった養蚕業とともに今、セピア色になりつつあります。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める